

# 原稿にも人生にもテン・マルがある！

多くの作家の原稿に接する編集者。本の制作では、校正者・校閲者から疑問や意見が飛んできて句読点も問題になる。数多くの本を世に送り出し名編集者として知られる石井紀男さん、ご自分でもエッセイを多く書かれている坂崎重盛さんに、文章における句読点をめぐって話を聞いた。

「文源庫」代表

**石井紀男**

随文家

**坂崎重盛**

## 安藤鶴夫の句読点

——句読点なくして日本語読めないのに、みんなほとんど感謝してない！ 恩を仇で返している！ ふと、そう思っています。ではお願いします。坂崎 のつけから脱線しますが、人生にも句読点がありますね。病気なども、働きづめだったりしたらいい

休養になるから、これは人生における句読点です。

たとえば北海道では、どこまでもまっすぐな道路があるが信号がない。だから車は猛スピードで飛ばし大事故が多い。信号での停車は面倒くさいといえれば面倒くさいのですが、信号は道における句読点です。

石井 北海道では、信号はないし、前後左右、別の車も走っていない。

そうなるよ、まさに句読点のない道路になりますね（笑）。

坂崎 ま、本筋の話をしましょう。資料をいくつか持ってきたんですよ。石井 僕も坂崎さんに言われてあわてて探していたんだけど、昔、いただいた本で……（井上ひさし著『文章読本』を出す）。

坂崎 それは井上さんからもらったんですか？ 文庫になってますよね。

僕も二回か三回買いました（笑）。

石井 この中に句読点の話があります。一章分くらいですけれど。

坂崎 戦後の井上ひさしさんの話の前に、ちよっと明治の話をしていいですか？ 尾崎紅葉の硯友社のころまでは、まだ文語体ですよ。泉鏡花なんか少しひきずっていた。口語の文章が最初に出てきたのは、三遊亭圓朝の聞き書きっていうのかな。いわゆる講談速記本。明治十年代だったと思いますが、『牡丹灯籠』はちゃんと句読点がついているんですよ。そのあと、尾崎紅葉などは、句読点があっても文語調で読みづらい。樋口一葉の『たけくらべ』も、そのまま朗読しようと思っただけと読めなかった。それで自分で区切って、まあ句読点ですよ、ね、「廻れば大門の／見返り柳／いと長けれど／……」と。すると、いきなり読みや

すくなった。句読点で突然思い浮かんだのが安藤鶴夫。この人、やたら多いですよ、句読点が。

石井 多いですね。

坂崎 石井隊長（坂崎さんは石井さんを隊長と呼ぶ）、いまの文章教室の指導では、安藤の文章じゃダメでしょう。ぼくは大好きですけど。

石井 ダメでしょうね。いまどきの文法とか、解説にあるのは、法則として、一つのセンテンスの文字数は五二文字、そこで句読点は一・四九回使えと、そのくらいがバランスがいいということになってるんですけど、根拠はどこから来ているのか（笑）。

坂崎 安藤は、なんでこんなに句読点が多いかというと、読みやすい、音読しやすいんですよ。ひらがなを多用しているの、句点を入れないと読みづらいということもある。そ

れにしても多い。どうしてなのかなあと思ったんですけど、あの人はお父さんが義太夫語りなんです。安藤もお父さんの影響で語れる。岩波書店の印刷所として知られる精興社社長・白井赫太郎と若き安藤は、偶然ですが義太夫仲間です。安藤はラジオ放送にも出演していましたが、この語り口は句読点の多い文章と似て、しゃべればいい。「このころ、よく、こんなことを考える。いま、古い、といわれているものが、ほんとうに、古いものなのだろうか。いま、あたらしい、と、いわれているものは、……」（講談社文芸文庫『歳月』所収「わたしの東京」と。つまりある面では朗読用の文章なんです。三遊亭圓朝の講談速記本と相通ずるものがある。安藤の文章はものすごく読みやすい。誰でもこのまま朗読できます。